2025－12－1

43【街の散策からの気づき発見】

街の小さい秋みつけた

会員　K.T.

大落古利根川遊歩道

市立図書館前の紅葉

生け垣の柿

晩秋の大落古利根川遊歩道を散策している。遊歩道の桜並木は、例年、黄色・オレンジ・赤へ紅葉し、秋の「さくらもみじ」を楽しませてくれていたが、今年は紅葉の前に散った葉が多いように見受ける。 私の感覚になるが、今年の秋は短い、夏からいきなり冬がきたような感じだ。それでも秋の風情はある。紅葉は落葉前に葉の栄養分を幹に回収して冬を越し、春を待つ準備のためで植物の知恵らしい。この時期の街の散策は、あちこちに秋の風情を楽しめる。

「ちいさい秋みつけた　作詩サトウ・ハチロ―　作曲　中田喜直

だれかさんが　だれかさんが　だれかさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた
めかくし鬼さん　手のなる方へ　すましたお耳に　かすかにしみた
よんでる口ぶえ　もずの声　ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた

だれかさんが　だれかさんが　だれかさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた
おへやは北向き　くもりのガラス　うつろな目の色　とかしたミルク
わずかなすきから　秋の風　ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた

だれかさんが　だれかさんが　だれかさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた
むかし　むかしの　風見の鳥の　ぼやけたとさかに　はぜの葉ひとつ
はぜの葉赤くて　入日色　ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた　」

晩秋の景色に、小さい頃に習い覚えた「ちいさい秋みつけた」の童謡を思い出した。私は、この童謡を童謡のまゝ感じ、詩の内容について深く考えたことはなかった。ふと、『 “ちいさい秋”てなに？』、と思い、調べると、サトウ・ハチロ―の造語であること、いろいろ解釈があること、を知った。この作品は、昭和３０年(1955)１１月、NHK「秋の祭典」特別番組用に作詩・作曲された作品で、其の後、合唱曲として広く歌われるようになった。サトウ・ハチロ―は、この詩について、「原稿用紙の前に布団に腹ばいになって外を見ていたら赤くなったハゼの葉を見て、いいしれぬ秋を感じて、この詩を書きあげた。」、らしい。一方の作曲は、「ちいさい秋みつけた」の詩の作曲を依頼された中田喜直が三鷹市の井之頭公園を散策していたときに、浮かんだメロディーだった、という。このメロディーと、いっしょに『小さい秋みつけた』の詩は、思い出した。

詩の解釈については諸説あるも、「一番は、耳に聞こえた秋で、病であろう、外に出られない『誰かさん』が、耳で聞いた秋。二番は、肌で感じた秋で、病床に縛られている『誰かさん』が、隙間風で感じた秋。三番は、むかしの思い出の秋で、昔の思い出の中で、『誰かさん』が、なつかしく感じた秋。」、となるらしい。

『あれ？　季節に「小さい」とか、あるのだろうか？』、と思ったが、散策での風景を一部切り取った写真でみると、「小さい秋」という表現はピッタリするように感じた。詩人の表現力とは、たいしたものだ、と思う。

『そうか、耳で聞く秋もある』、と思い出したのは童謡の「虫のこえ」だ。明治４３年(1910)文部省唱歌だという。

「あれまつむしがないている　ちんちろちんちろ　ちんちろりん
あれずずむしもなきだした　りんりんりんりん　りいんりん
秋の夜長をなきとおす　あゝおもしろい　むしのこえ
きりきりきりきり　こおろぎや　がちゃがちゃがちゃがちゃ　くつわむし
あとからうまおいおいついて　ちょんちょんちょんちょん　すいっちょん
秋の夜長をなきとおす　あゝおもしろい　むしのこえ　」

こどもの頃、田舎で、これらの虫の声をよく聞いたものだ。虫さん達は環境変化で少なくなり、人の住まいは都市化した。かっては、耳で聞く「秋のこえ」があった。最近は、すっかり聞かなくなったことに気が付いた。